

「展覧会の絵」、組曲だからオムニバス、1曲1曲にしっかり特徴づけ。想像力逞しくイメージ膨らませ、一義には譜面から、イマジネーションを働かせてプラスオン。物語を話す様にわかりやすく、脚色を加え音色に表情を付けて、時には大袈裟にパフォーマンス。シリアスで真摯が基本、それに子供に対する母性のあたたかさ、そして茶目っ気。生き生き八面六臂の活躍、前衛的な原画、その具象化でなし。

「堂々と闊歩またはそそくさ考え中」「丸まっちい可愛らしいあどけなさ」「小刻みなコミカルダンス、可笑しげな仕草」「チャッチャカチャッチャカ、ヒステリー状態で飛び回るお婆さん」「緩やかな流れ、静寂な動き、ストップモーション」「フルテンションのクライマックス、これでもかの念押し」「遠くからノッシノッシ、重量感が横切り、去って行く」「鷹揚な金持ち&境遇を託つキンキン声」など……。

今回、プログラム片手に注意深く、確認しつつ耳を傾ける。この曲をCD初め何度かライブで、それこそ何十回聴いている筈だが。「テュイルリーの庭」子どもたちと、「卵の殻を……」雛をごっちゃんに。「バーバ・ヤガー」を「キエフの大門」が2ヴァージョンあると勘違い。大雑把に把握していたことが判明、いい加減さを恥じる思い。

17年前、ピアニストを知った最初のリサイタルでも聴く。「観客の目や耳を意識せず没頭、自分の解釈で大曲を力一杯に料理、雄弁で説得力、熱演。颯爽キラキラなる輝き、全体に明る過ぎ、もっと暗い陰があってもよい様に感じる」が感想。当時の若々しい演奏に、素敵な進化と熟成がプラス、剛に柔が加味。

「夜のガスパール」から「オンディーヌ」、演奏前にストーリーをレクチャー、落ち着いてラヴェルさんの世界を表現、わかり易いイメージ描写、生き生きとした水の輝きや動き。以前にこの会場で全曲を聴く、大曲だと身構えた記憶。アンコールの「クシコスポスト」、運動会の季節、徒競走(死語なのか)のBGM、こんな曲名だったんだとニコニコ。(2014.9.3)

ショパン：幻想即興曲 嬰ハ短調 Op.66

ショパン：スケルツォ 2番 変ロ短調 Op.31

ラヴェル：「夜のガスパール」からオンディーヌ

リスト：「パガニーニによる大練習曲」3番 嬰ト短調「ラ・カンパネラ」

ムソルグスキー：組曲「展覧会の絵」

(アンコール)<BR>

---

ショパン：ノクターン 20番 嬰ハ短調 Op.poth

ネッケ：クシコスポスト

---